

天の磐戸日食を探す

谷川清隆 (国立天文台)

email: tanikawa.ky@nao.ac.jp

要旨:

『日本書紀』(神代より七世紀末までの歴史書、全30巻、編纂は西暦720年)の神代巻上に、有名な「天の磐戸」の神話が記載されている。
天照大神あまてらすおおみかみが素戔鳴尊スサノヲのみことの乱暴狼藉らんぼうろうぜきに耐えかねて天石窟あまのいわやに入って、磐戸いわとを閉じて籠ってしまった。そのために、空が暗くなってしまった。残された神々は、天照大神を窟から誘い出すためにさまざまな工夫をこらす。それは最後に成功し、もとの昼間に戻る。最後に素戔鳴尊は根の国に去る。これが神話の大筋である。

江戸時代以来、この神話は皆既日食を見た経験を書き残したものであるとの意見がある(荻生徂徠)。現代の天文学者もこれに賛成する。

「天の磐戸」日食候補を決めたい、決めることができないにしても候補を絞りこみたい。歴史関係者だけでなく、何人かの天文学者が挑戦した。だが、成功していない。理由ははっきりしている。日本書紀の中で、この記事は孤立している。年代の知られている事件やできごとと繋がっていない。歴史解釈が必要である。そこで、このような場合、どうすればよいかを考察する。

皆既日食はきわめて印象的なできごとであるが、意外なことに、歴史上、ほとんど記憶されていない。記憶されているものがいくつかある。それらの特徴から、皆既日食が記憶されるための「条件」を考案する。「条件」がもっともらしいことを示すために、世界各地での皆既日食の頻度を計算する。また記憶された日食の例を紹介する。

「天の磐戸」日食は「条件」を満たしているように思われる。とすると、日本歴史の中でどの時代を探せばいいのか? 天文学者からの単純な示唆を述べる。

そのほか、参考のために歴史解釈を入れた有力な先行研究者の仕事を紹介する。